

## 地球環境問題の根本的原因についての一考察：快感原則を中心として

著者	中丸 寛信
雑誌名	甲南経営研究
巻	55
号	4
ページ	25-50
発行年	2015-03-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1260/00002157/">http://id.nii.ac.jp/1260/00002157/</a>

# 地球環境問題の 根本的原因についての一考察

——快感原則を中心として——

中 丸 寛 信

## Ⅰ は じ め に

筆者は前稿において、地球環境問題解決のための鍵は内なるエネルギーの開発にあることを、著名な論者の主張を踏まえながら考察した<sup>(1)</sup>。その「はじめに」においては、今日「世界が必要とする資源（穀物・飼料・木材・魚および都市部の土地）を提供し、二酸化炭素の排出を吸収するために必要な土地の面積」を示す「エコロジカル・フットプリント」<sup>(2)</sup>という指標がつくられているが、それによれば、2003年にはすでに人間は地球1.25個分の資源を使っているといわれていることを紹介した<sup>(3)</sup>。それが2009年現在では1.30近くになっ

---

(1) 中丸寛信「地球環境問題解決のための鍵——内なるエネルギーの開発——」『甲南経営研究』第52巻第1号、2011年7月、89～114頁。

(2) Wackernagle, M. et al. (1999) “National Natural Capital Accounting with the Ecological Footprint Concept”, *Ecological Economics* 29, pp. 375-390. Wackernagle, M. et al. (2002) “Tracking the Ecological Overshoot of the Human Economy”, *Proceedings of the Academy of Science* 99, No. 14, Washington, DC, pp. 9266-9271. また、エコロジカル・フットプリントとは、「人間社会が自らの消費する資源を生産し、既存技術のもとで廃棄物を吸収するのに必要な土地と水域」(Worldwatch Institute (2007) *Vital Signs 2007*, W. W. Norton, New York (ワールドウォッチ研究所『地球環境データブック2007-08』ワールドウォッチジャパン、2007年、66頁))とも表現されている。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

ているといわれており、ますます地球資源をはるかに超えた資源を使い続けている状況にある<sup>(5)</sup>。

また、アースポリシー研究所・所長であるレスター・ブラウンの著作『プラン B 3.0』から『『破綻しつつある国家』は『破綻しつつある人類文明』の初期兆候である』という指摘などを紹介したが、その後発刊された著作『プラン B 4.0』の中ではさらに次のような衝撃的な指摘をしている。「数か月前、『ニューズウィーク』誌の気候とエネルギーに関する記事を読んでいたとき、『従来どおりのやり方（以下、本書では“プラン A”と呼ぶ）は、この世界の終焉を意味するようになってきた』という一文が目飛び込んできた。この結論に驚く人は多いかもしれないが、森林伐採、土壌侵食、地下水位の低下、気温上昇など、世界の環境問題を研究する科学者たちは驚かないだろう。科学者たちは、しばらく前から、こうした動向が続くと、人類は困難な状況に陥るだろうと指摘してきた。ただ、その困難がどのようなかたちで表れるかは明らかではなかった」。「気候については、すべてが急展開しているようだ。北極海の夏の海水が、縮小こそしていたが、数十年は存続すると予測されていたのはわずか数年前のことだった。最新の報告書では、数年以内に消失する可能性が示されている。気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の最新報告書が発表されたのは、わずか数年前だが、すでに二酸化

---

(3) *Ibid.* (同上書, 66頁). なおその出典は, Global Footprint Network (2006) *National Footprint and Biocapacity Accounts*, note 23, である。

(4) Brown, L. R. (2009) *PLAN B 4.0*, New York: W. W. Norton & Company, p. 14 (レスター・ブラウン著, 織田創樹監訳『プラン B 4.0』ワールドウォッチジャパン, 2010年, 16頁)。

(5) 松井孝典氏は「経済の右肩上がりのためだけの構造改革を目指すのならば、地球システムを無視し、人間圏を崩壊へと導く、近視眼的な発想といわなければならない」(同著『地球システムの崩壊』新潮社, 2007年, 23頁)と記している。

(6) Brown, L. R. (2008) *PLAN B 3.0*, New York: W. W. Norton & Company, pp. xi-xiii (レスター・ブラウン著, 織田創樹監訳『プラン B 3.0』ワールドウォッチジャパン, 2008年, v-vii 頁)。

炭素排出量の増加、気温上昇、海面上昇はすべて、IPCCのワースト・ケース・シナリオよりも急速に進行している。「私たちは政治の“転換点”と自然の“限界点”の間で競争をしている。グリーンランドの氷床を救い、結果として生じる海面上昇を回避できるほど速やかに、炭素排出量を削減できるのだろうか」。「私たちが直面する質問は、『私たちは、何をなすべきであろうか』ではない。なぜなら、世界の状況を分析している人たちにとって、それはむしろ明らかだからである。問題なのは、『許された時間内で、いかにそれをなすべきであろうか』である。残念ながら、私たちは、どれだけの時間が残されているのかわからない。自然が時間を管理しているが、私たちにその時計が見えない」。「この混乱から抜け出すためには、これまでとは違った考え方、新しい物の見方が必要である」と記している<sup>(7)</sup>。

さらに、IPCCの第5次評価報告書の中では、「気候に対する人為的影響は、大気と海洋の温暖化、世界の水循環の変化、雪氷の減少、世界平均海面水位の上昇、及びいくつかの気候の極端現象の変化において検出されている。人為的影響に関するこの証拠は、第4次評価報告書以降増加し続けている。人間による影響が20世紀半ば以降に観測された温暖化の支配的な原因であった可能性が極めて高い」と記されている<sup>(8)</sup>。

また前稿では、地球環境問題をはじめ様々な問題が押し寄せている今日、それらを解決するための鍵について若干検討し、これから私たちが向かうべ

---

(7) Brown, L. R. (2009) *PLAN B 4.0*, pp. xi-xiv (レスター・ブラウン著、織田創樹監訳『プラン B4.0』vii-xii頁)。山本良一氏も、同著『温暖化地獄——脱出のシナリオ』ダイヤモンド社、2007年、同著『温暖化地獄 Ver. 2——脱出のシナリオ』ダイヤモンド社、2008年の中で、温暖化の危機について警告している。また温暖化は安全保障リスクであり、黒船来航に匹敵する脅威であるとも記している（『日本経済新聞』2014年12月10日第2部参照）。

(8) 「気候変動に関する政府間パネル 第5次評価報告書 第1作業部会報告書」の「政策決定者向け要約 主なメッセージ」日本語版（気象庁訳）2014年6月19日参照（「環境省 IPCC 第5次評価報告書について」<http://www.env.go.jp/earth/ipcc/5th/>、2014年12月13日アクセス）。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

き方向は、1人ひとりの「内なるエネルギーの開発」にあることを確かめてきた。さらに今日、私たち1人ひとりの欲望の抑制・昇華の必要性や必然性へと導く「理論体系」、日々の生活において、いつでも、どこでもチャレンジできる「内なるエネルギーの開発のための方法」が求められていることを指摘した。そして、高橋佳子氏によって提示されているトータルライフ<sup>(9)</sup> (TL) 人間学に非常に精緻な理論体系や、内なるエネルギーの開発のための具体的・実践的方法（メソッド）があることも記した。

そこで本論文では、前稿に引き続くものとして、まず地球環境問題の原因について検討し、その原因を克服していく手がかりを得るために、原因について深く考察していきたい。

## II 地球環境問題の原因

たとえば、ジェームズ・G・スペース（James G. Speth）は、地球環境の破滅へと向かう「この危機を招いた大きな要因は、私たちの中に居座る、強固な経済成長至上主義である。経済の成長はJ.R. マクニールの言うとおり、<sup>(10)</sup>『間違いなく、20世紀の最も重要な概念』<sup>(11)</sup>であった」と記している。

---

(9) トータルライフ (TL) 人間学（「魂の学」）は、高橋佳子氏が提唱する永遠の生命観に基づく人間学であり、現代社会の中で人間が見失ってしまった絆——人と人、人と自然、人と社会、自分と人生、心と体などを結ぶ目に見えないつながり——を知り、その回復に努め、応えていく道を示す人間学である（高橋佳子『グランドチャレンジ』三宝出版、1998年、429頁参照）。TL 人間学には、たとえば内なるエネルギーの開発に大きな力を発揮する「ソウル・コンパス」（魂羅針盤）といわれるものをはじめ、様々な実践的方法（メソッド）がある（詳細は高橋佳子『新しい力』三宝出版、2001年；同著『私が変わります』宣言』三宝出版、2002年など参照）。

(10) McNeill, J. R. (2000) *Something New Under the Sun: An Environmental History of the Twentieth-Century World*, New York, W. W. Norton, p. 33.

(11) Speth, James G. (2004) *Red Sky at Morning*, Yale Univ. Press, p. 192（ジェームズ・グスタフ・スペース著、浜中裕徳監訳『地球環境危機を前に市民は何をすべきか』中央法規出版、2004年、223頁）。

確かにスペースが指摘しているように、20世紀には経済成長を優先する価値観、経済的豊かさが人間の幸せにつながるという考え方が強く存在し、それに沿って資本投下が次々に行われ、多くの人口を支える生産物も産出されてきた。

では、その「経済的豊かさ＝人間の幸せ」というとらえ方、考え方はどこからきているのであろうか。それを人間の意識のレベルにたずねるならば、「もっと楽に」「もっと利益を上げて」「もっと豊かに」という快感原則<sup>(12)</sup>を生きようとする人間の自我意識からきているといえよう。

あらゆる生命は、自分にとって生きやすい環境を求め、生きにくい環境から遠ざかるようとする。それは、生命<sup>ながら</sup>を存えるためには必須の感覚であり、それがなければ生きることを続けることは、困難になってしまう。

そこから、私たちは、快苦に基づいた感覚を大きく育ててゆく。快や利益をもたらし、たやすいものを私たちは自分に引き寄せ、逆に、苦や損害をもたらし、厄介なものは自分から遠ざける。

快の刺激がやってくる時、私たちは自ら近づき、大きく心を膨らませる。いきいきとし、エネルギーに満ち、幸せな気持ちになる。一方、苦の刺激がやってくる時、私たちは身を遠ざけようとし、心をしばませてしまう。嫌な感じで息苦しく、不自由で、エネルギーが萎え、元気がなくなってしまう。

苦痛を避けて、より快が得られることへ——。それは、生命維持の本能に基づいているだけに、強いエネルギーを発するものであった。より快適に、

---

(12) 快感原則とは、「苦痛を避け、快を求めようとする傾向」(外林大作他編『心理学辞典』誠信書房、1981年、51頁)、あるいは「人が不快な状態を避けて本能的な欲望・衝動の即時的・直接的な満足を得ようとする傾向を持っていることである」(中島義明他編『心理学辞典』有斐閣、1999年、102頁)。またそれは、「より大きな快感を得られることを第1義とする原則。この原則に従うなら、より快適に、より楽に、より便利に、より安心できる方向へと突き進むことになる。20世紀の社会は、この原則に従う自我によって大きな流れがつけられてきた」(高橋佳子『ディスカバリー』三宝出版、1996年、47～48頁)。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

より楽に、より便利に、より安心できる方向へとまっしぐらに突き進んできた快感原則は、人々の関心を「目先のこと、自分のこと、利害のこと」へと駆り立ててきた。数字や見えるものだけに手応えを見出す唯物的な世界観に従って、「今」という刹那にすべてを集めて、生きたいように生きる生き方で突き進んできた。その場その場が良ければと、後ろを振り返ることもなく進んできたのではないだろうか。

また、快感原則を生きようとする人間の自我意識は、自分中心主義といえる性質を抱いている。人間の自我は、「自分のこと、目先のこと、自分の利害の関わること」にしか興味が無い。自我至上主義は、それがいかに自らを正当化する巧妙な論理を組み立てていたとしても、自分の欲望に基づき「やりたいようにやりたい」という情動をその根底に置いている。また、人間の自我が抱く「快感原則」には限りがない。強い欲求を持たば持つほど、さらに効率よく、もっと多くの恩恵を世界から搾取するための技術を開発しようとし、実際にそれが行われてきた。そのような「快こそ幸せ」と取り組んできた結果の集積が、今日の地球環境問題となって現れているといえよう。その地球環境問題は文字通り、地球全体を覆っているものであり、世界全体の経済活動、人々のライフスタイルとも深く結びつき、局所的な対応ではどうすることもできない問題となってしまっているのである。<sup>(13)</sup>

今こそ私たちは、一人ひとりの中に深く根づいている過剰な「快感原則」という地球環境問題の根本的な原因に正面から向き合っていかなければならないときであると思われる。<sup>(14)</sup>

---

(13) 同上書、42～50頁；同著『グランドチャレンジ』31～39頁、275頁など参照。

(14) 中丸寛信『地球環境と企業革新』千倉書房、2002年、第10章参照。

### Ⅲ なぜ私たちは「快感原則」を生きることになるのか①

#### ——心理学からのアプローチ——

ここではまず、心理学からのアプローチとして、A. H. マズロー、岡本重雄氏、青井和男氏の文献を参考にしながら、なぜ私たちが「快感原則」を生きることになるのかについてみていく。

#### 1. A. H. マズローのとらえ方

まず A. H. マズローの心理学からみていく。A. H. マズローの研究における中心的テーマは、精神的に健康で自己実現しつつある人間についての研究であり、人間はどれだけ成長できるのか、また何になることができるのかという問題意識のもと、自己実現的人間の特徴について数多くの説明をしている。また、マズローによれば、人間はそれぞれ自己のうちに二組の力をもっている。「一組は、恐れから安全や防衛にしがみつき、ともすると退行し、過去にたより、母親の腹や乳房との原初的な結びつきから脱け出すことを恐れ、偶然の機会をとらえることを恐れ、すでに所有するものを危険にさらすことを恐れ、独立、自由、分離を恐れる。他の組の力は、自己の全体性や自己の独立性へ、その人の全能力の完全な働きへ、最も深い現実の無意識的自己を受け容れると同時に、外界に対してもつ確信へと人を促すのである」<sup>(15)</sup>。しかし同時に、「人類は原理的にいって誰でも善良で健康な人になりうるが故に希望を持つことができる。しかしまた、実際には非常にわずかな人だけが善良な人になっているので悲観せざるをえないのである」<sup>(16)</sup>とのべ、前者から脱して後者の方向に生きることの困難さを指摘している。

---

(15) Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, D. Van Nostrand, p. 46 (A. H. マズロー著、上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房、1964年、72～73頁)。

(16) *Ibid.*, p. 163 (訳書、218頁)。



では、なぜそうなるのであろうか。それについて、マズローが指摘している人間の基本的欲求を手がかりとしてみていく。

周知のごとく、マズローは人間の基本的欲求としてつぎのものをあげている。

- 生理的欲求：飲食物、性、睡眠などに対する欲求。
- 安全の欲求：危険や恐怖のない、安全で秩序立った予測のできる、組織化された、頼りにすることのできる世界への欲求。
- 所属と愛の欲求：他者との愛情に満ちた関係、すなわち、自己の所属しているグループ内での地位への欲求。ただし、ここでの愛の欲求は与える愛と受ける愛の両方を含む。
- 承認の欲求：安定し、基礎の確立した、自己に対する高い評価や自己尊敬、自尊心、また他者から尊重されることに対する欲求。
- 自己実現の欲求：人が本来持っている潜在的可能性を実現しようとする欲求。

また、これら5つの欲求は、低次から高次への階層をなしており、低次欲求が満たされてはじめて、より高次の欲求が顕在化してくると仮定している。ただし、実際には、社会のほとんどの人はそれぞれの欲求について部分的に満足し、同時に不満をもっており、満足度は優勢度のヒエラルキーを上昇するにつれて減少するといえようと説明している。さらに、自己実現の欲求が明確に現れるのは、通常低次の4つの基本的欲求があらかじめ満たされた場合であるとも<sup>(17)</sup>のべている。すなわち、これらの基本的欲求は、相対的優位さの原理に基づいて、公正なはっきり定まったヒエラルキーに位置づけられる。その意味で、生理的欲求は安全の欲求よりも強く、安全の欲求は所属と愛の

---

(17) Maslow, A. H. (1954) *Motivation and Personality*, Harper & Row, pp. 80-106 (A. H. マズロー著、小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率大学出版部、1971年、89～117頁)。

欲求よりも強く、所属と愛の欲求は承認の欲求よりも強く、承認の欲求は自己実現の欲求よりも強いのである。これは選択または優先の順序であると指摘している<sup>(18)</sup>。

ただし実際には、社会のほとんどの正常人は、基本的欲求について部分的に満足し、同時に不満をも持っている。また、いかなる行動も、ある1つの欲求よりも、幾つかあるいはすべての基本的要因により、同時的になされる傾向がある。さらに、これらの欲求は全体としてみると、普通の人間の場合、意識的なものより無意識的なものが多い。基本的欲求と呼ばれるものは適切な技法、専門的な人間がいれば意識的になるかもしれないが、無意識的なものである場合が多いとも記している<sup>(19)</sup>。

以上のことから、マズローによれば、私たちは自己実現欲求よりも強い生理的欲求などの低次の基本的欲求に対してほとんど無意識的であり、それに基づいて判断し行動することから快感原則を生きざるを得ないことになる。

## 2. 岡本重雄氏のとらえ方

岡本重雄氏は、マズローが『完全なる人間』においてのべている「人間がますます成長し、向上し、成熟してゆく生活態度」を「生命にいたる道」と名づけ、それは「人間が無限に向上し、無限に前進しようとすることを意味する。無限にそのために努力する (streben) ことを意味する。ただし、人間のこの欲求は、きわめて実現困難なもので、短時間にすべてがわかり、すべてが解決されるといったふうのものではない。なぜなら、無限の向上・無限の前進の根底には、私たちが自己中心性から脱却し、自他一体感の上で生きるということが、条件となっているからである<sup>(20)</sup>」と説明している。岡

(18) *Ibid.*, pp. 146-147 (訳書, 164頁).

(19) *Ibid.*, pp. 100-102 (訳書, 110~112頁).

(20) 岡本重雄『人間心理学』朝倉書店、1972年、159頁。なお、岡本氏によれば、

本氏は、ここでの「自己中心性からの脱却」を「高次の心境に達するためには、どうしても、まずもってなさねばならぬ一つの重大な<sup>(21)</sup>こと」であるとし、またそれは「自己中心の本能的欲望群すなわち煩惱から脱却することである。自分の無力を知り、自己を否定し、自分を棄却することである。己れを虚しくすることである。小さな自我のプライドを捨て去ることである<sup>(22)</sup>」などのべている。それらのことを一時的に体験することは可能であるが、それを持続させることは非常に困難である。「たとえば人を愛するという、人に親切であるということ、嘘をいわないということ、清い美しい心でいたいということ、一生懸命勉強するという、与えられた仕事に打ち込むということ、自己中心の打算をやめるということ、自己中心の功利主義（利益追求）をやめるということ、どれ一つとってみても、決して私たちはそのよき行いに徹底できないのである。どれも永続きしないのである。なぜだといえば、私たちは煩惱（自己中心性）がむやみと強く、自分の利益・自分の幸福・自分の立身出世・自分の名声・自分を有名にしてくれるような仕事、そういったことばかりを心が追い求めていて、決して、他人の利益・他人の幸福・他人の財産・他人の名誉を大事がるなどという気持にはならないからである<sup>(23)</sup>」。すなわち、よき行いの持続を困難ならしめているものは、岡本氏によれば「自己意識だけなのではなくして、その自己意識の根底にある自己中心の欲

---

「内面的によく発達した人々、自己実現的な人間は、自己中心でもないし、他中心（自己を滅却して他人に奉仕する）でもない。自他一体的に生きてゆくのである。『我れも生き、他も生きる』である」（同上書、163頁）。E. フロムも同様に、「他者への愛と自分自身への愛とは二者択一ではない……。反対に、人間が自分自身を愛するという態度は、他者を愛しうるすべての人びとに見出されるであろう。愛は原理的にいって、《対象》とわれわれ自身の自己との結合とに関するかぎり、分かちがたいもの（indivisible）である」（E. フロム著、懸田克躬訳『愛すること』紀伊国屋書店、1959年、80～81頁）とのべている。

(21) 岡本重雄『無我の心理学』朝倉書店、1976年、77頁。

(22) 同上書、78頁。

(23) 同上書、73～74頁。

望群そのもの<sup>(24)</sup>」であり、「生存欲・所有欲・優越欲・愛欲・帰属欲・自由欲などがそれなのであるが、今の心理学ではこれらを総合して“自己中心性”(ego - cetricism) と呼んでいる<sup>(25)</sup>」ということである。「日常生活のあらゆる場面で、とくに対人関係においてこの自己中心性が実に微妙に、実に巧妙に、しかも実にしつこく働いているのである。誰からもよく思われたい、誰からも嫌われたくない、憎まれたくない、皆から愛され、歓迎されるような人間になりたい、皆からうとまれたい、仲間はずれにされたくない、できればお山の大将になりたい、中心人物になりたい、指導力をもちたい、有名になりたい、損をしたくない、得をしたい、などなど無限の欲望となって、それは働いているのである。……この自己中心性はたえず私たちの尻をはたき、耳を引張って、『がんばれ！がんばれ！』と、生存競争に負けないように私たちをけしかけているのである。したがって、私たち凡夫の心は静かでないし、安らかでないし、楽しくないのである<sup>(26)</sup>」。

以上のことから、岡本氏によれば、「自己意識の根底にある自己中心の欲望群」が私たちをして快感原則を生きさせることになるといえよう。

### 3. 青井和男氏のとらえ方

青井和男氏によると、集団のライフ・サイクルを「再生させる原動力は、個人と社会が無意識の低層に沈潜し、聖なる高層を超越するところに<sup>(27)</sup>」ある。また、高層心理学はフロイトのいう超自我（倫理）の次元にとどまることはできない。倫理はいかに普遍的ではあっても、人間を超越したものにはならないからである。真の超越者は個人でも社会でも人類でもなく、現実を超え

---

(24) 同上書、54頁。

(25) 同上書、54頁。

(26) 同上書、54頁。

(27) 青井和男『小集団の社会学』東京大学出版会、1980年、273頁。

た「非存在」なのかもしれない。この意味で高層心理学は必然的に人類を超越した「聖なる世界」に入る。同様に低層（深層）心理学もフロイトのいわゆるイドの世界にとどまることはできない。それは人間の生理を基礎づけている「自然の世界」にまで下降していかざるをえないであろうと記している<sup>(28)</sup>。

とくに低層（深層）心理学的な表現によれば、「われわれの意識には、主客の二元的分極作用が働いている意識層、記憶をやどす半意識層（ないしは前意識層）、抑圧された記憶の貯蔵庫たる無意識層が考えられるが、これで終わるのではない。その底に心的生活の基礎となる集合的無意識と、さらにそれを突き破ったところに鈴木大拙のいわゆる『宇宙的無意識』<sup>(29)</sup>とも名づける層がある。フロイトの無意識層が個人の生活史の貯蔵庫たる個人的無意識だとすれば、集合的無意識は人類の発展史の貯蔵庫たる人類に普遍的な無意識（C. G. ユングのいわゆる集合的無意識はこれである<sup>(30)</sup>）であり、宇宙的無意識は動物の進化史の貯蔵庫たるすべての動物に普遍的な無意識だといつてよい。さらに生物一般の次元にまで下ることもできるだろう<sup>(31)</sup>。われわれは「意識→個人的無意識→集合的無意識→宇宙的無意識へと心を深化させなければ、心を開放することはできない。人間の根底は心理的でもなければ論理的・倫理的でもなく、それを超えたところにある。善悪という精神をこえ、好悪という動物心をこえたところの、いくなれば植物心たる『無』にあるのではないか。あらゆる『不安』は己の分らぬところから生ずるのであるから、主客が分離しているかぎりこの二元的相剋にはつねに不安の感情がつきまとわざるをえない<sup>(32)</sup>」。

---

(28) 同上書、203頁参照。

(29) 『鈴木大拙全集』第11巻、岩波書店、1970年、125頁。

(30) Jung, C. G. (1931) *Seelenprobleme der Gegenwart*, Rascher Verlag (C. G. ユング著、高橋義孝・江野専次郎訳『現代人のたましい』日本教文社、1970年、112頁)。

(31) 青井和男、前掲書、207頁。

(32) 同上書、208頁。

以上のことから、青井氏によれば、私たちが聖なる高層や無意識の低層へと心を深化できていないために快感原則を生きざるを得ないことになる。

#### Ⅳ なぜ私たちは「快感原則」を生きることになるのか②

##### ——TL 人間学からのアプローチ——

続いて、高橋佳子氏が提唱している TL 人間学に基づきながら、快感原則についてさらに深く考察していく。高橋氏によれば、快感原則——苦痛を避けて、より快が得られることへ——は、私たち人間の一方の極である肉体の原則、より大きな快感が得られることを第一義とする原則であり、それは、生命維持の本能に基づいているだけに、強いエネルギーを発するものである<sup>(33)</sup>。

では「快感原則」という生命の原則は、どのように生じてくるのであろうか。それを図表1に基づきながら、私たちの「人生の成り立ち」の中にもみていく。

図表1 「快感原則」という「生命の原則」の背景としての「人生の成り立ち」

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 生命としての誕生以前：完璧に守られるという胎内という原点</li><li>2. 生命としての誕生後の「人生の鉄則」<ol style="list-style-type: none"><li>① 不安の鉄則</li><li>② 依存の鉄則</li><li>③ 幾百幾千の他人の鉄則</li><li>④ 快苦の鉄則</li><li>⑤ 無自覚の鉄則</li></ol></li></ol> |
|---|

出所：高橋佳子『希望の原理』三宝出版，1997年，138～143頁参照。

##### 1. 生命としての誕生以前：完璧に守られるという胎内という原点

図表1にみられるように、「快感原則」は、第1に私たちがこの世界に生命として誕生する以前に「完璧に守られるという胎内という原点」に出発点

---

(33) 高橋佳子『永遠の生命』三宝出版，1996年，30～31頁。

がある。

人生の仕組みは、まず私たちが母親の胎内で十月十日を過ごすところから始まる。胎内の生活がいかに決定的であるかは、そこでの成長が驚異であることから容易に推し量ることができる。完璧ともいってよいほど、安全で快適なその胎内で、私たちは目に見えないほどの受精卵から、数千倍の大きさに成長する。それは同時に、すさまじい勢いですべてを吸収しているということに他ならない。その母親の胎内で過ごす期間、私たちは母親の喜びや悲しみ、困惑や葛藤といった情動のすべてをそのまま無意識の中に刻んでいくのである。

## 2. 生命としての誕生後の「人生の鉄則」

高橋氏は、私たちがこの世界に生命として誕生した後、その人生において誰もが避けられない共通の5つの鉄則があるとして、それを次のように示している。

### ① 不安の鉄則

私たちの誕生の共通項は、極めて安定した場所から全く無力に、投げ出されるように生まれてくることである。まるで、海図も羅針盤もないのに、<sup>とも</sup>艦綱<sup>つな</sup>を切られて出航してしまった大海の小舟のようであり、大地から切り離された若木のような根こぎ（根を引き抜かれた）の状態である。そのために、私たちは自分で埋め合わせることができないような根本的な「不安」を抱えることになる——「原初的不安」。人が一人になることを恐れ、孤独感にとさら弱いのも、この不安の鉄則ゆえである。<sup>(34)</sup>

---

(34) ロロ・メイは、これまでの様々な不安理論を、哲学的、生物学的、心理学的次元、ならびに文化的、歴史的次元において紹介・吟味し、不安についての包括的理論を提示しようとしている。なかでも、「心理学的に説明される不安」に関しては、①マウラー：不安と学習理論、②フロイトの理論的展開、③ランク：不安と個人化、④アドラー：不安と劣等感、⑤ユング：不安と非合理的なものの脅迫、⑥ホルネイ：

## ② 依存の鉄則

無力な子どもにとって母親は、全能の神にも等しい存在である。揺るぎなく確かで、自分に安心を与えてくれる母親だから、その後を追いかけて、母親の微笑みに応え、母親の言葉をおうむ返しに繰り返し、母親の仕草をまねて生き方を憶えてきた。母親を始めとして、完全に見える大人に依存することが確かな生き方だと思える。

---

不安ならびにパーソナリティ内の葛藤する諸傾向、⑦サリバン：対人関係で認められえないときの不安などについて論述している。そのうちとくに、ここで関連すると思われるのは、生物学的および心理学的発達の方を非常に詳しく条件づけることの幼児初期における対母親関係は、後の不安パターンにとって最も重要である——すなわち、母親に拒否されることが不安の原体験である——こと、心理学的葛藤は幼児期にさかのぼってとらえなければならないことなどである（ロロ・メイ著、小野泰博訳『不安の人間学』誠信書房、1963年）。また、メイは、「不安とは、その個人が、一個のパーソナリティとして存在するうに、本質的なものと解するある価値が脅やかされるときかもし出される気がかり（apprehension）である」（同上書、153頁）と定義している。さらに、不安を正常不安と神経症的不安に分類しつぎのように説明している。「正常不安は、(1) 客観的脅やかしに対して不釣り合いではない。(2) また心内の葛藤の抑圧とか、あるいは他のメカニズムを含まず、その必然的結果として、(3) その処置のため、神経症的な防衛メカニズムを必要としない」（同上書、156頁）。「一方、神経症的不安は、脅やかされたとき、(1) 客観的危険と不釣り合いな、(2) 抑圧とか（分離）、その他の葛藤を含み、結果として、(3) 禁止とか、症候の発達とか、さまざまの神経症的防衛メカニズムのような、活動と認識を縮小させることによって処置される反応である」（同上書、159頁）。

さらに、不安と恐怖との相違について、たとえばホーナイはつぎのようにのべている。「恐れと不安とは、どちらも、危険に釣り合った反応であるが、恐れのみにおいては、危険が明瞭に客観的なものであり、不安のみにおいては、危険がかくれており主観的である。つまり、不安の強さは、事態が当人にとって持っている意味に釣り合っている」（ホーナイ著、我妻洋訳『現代の神経症的人格』（ホーナイ全集第二巻）誠信書房、1973年、30頁）。またホーナイは、不安を原始不安（Uranst）と基本的不安（basic anxiety）に分類している。前者は現存する危険（病気、貧困、死、自然力、敵）に直面した際の人間の無力感の現われであり、後者はそれ自体神経症的な症状であるが、それは両親に対する依存と反抗の間の葛藤の結果生まれるものである。また、後者での無力感の大部分は、抑圧された敵意によってよび起こされる。さらに危険の源として感じられるものは、主として、他人が抱いているのではないかと予想される敵意である（同著、安田一郎訳『精神分析の新しい道』（ホーナイ全集第三巻）誠信書房、1972年、203～206頁）。



地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

しかし、依存というのは、自分の感じ方や判断よりも、他人の言動に大きく左右されることである。世間の眼を気づかい、他人との比較葛藤に明け暮れる。しかも、確かなものは自分の外側にあり、内側の心は何か空虚で空っぽであるかのような感覚が強まってしまう。

### ③ 幾百幾千の他人の鉄則

不安と依存の鉄則ゆえに、私たちは自分より強く大きく確かそうなものなら、何でも吸着しコピーし身につけるようになる。まるで乾いたスポンジに水が染み込むように、母親や父親、兄や姉、学校の教師や友だち、本や雑誌、テレビと、次第に世界を広げながらあらゆるものを自分のものにしていく。世間の常識や価値観、風俗や習慣、しきたり、約束事に基づいた自分の生き方や言動の表わし方。それは、自分で意識することもなく、ごく自然に自動的に身につけてきたものである。つまり、私たちが自分自身だと思ってきたものの大部分は、自分以外の他人のコピーであったということになる。

### ④ 快苦の鉄則

どれほど熟慮を重ねて人生を歩んできたつもりでも、その判断の基となった尺度、何が確かで何が大切かを決めてきた尺度は、ほとんど自分を守るための「快苦」の肉体感覚だけだったと言っても過言ではない。それほど、私たちにとって「快苦」の感覚は決定的なのである。「快」に対しては肯定し、「苦」に対しては否定する。いかに「快」を引き寄せ、いかに「苦」を排除するかということに誰もが幼い頃からずっとエネルギーを注ぎ続けてきたといえるのではないか。そして快苦は、自己保存と表裏であるがゆえに、人生の成り立ちの必然として、人は誰もが独善感、エゴイズムの傾きを抱えることになるのである。

### ⑤ 無自覚の鉄則

最後の鉄則は、「無自覚の鉄則」である。これまでみてきた私たちを呪縛するすべての鉄則に対して、人間が無自覚であるということである。自分が

生まれてきた時、引き受けた条件を意識していた人は誰もいない。自分の癖を、どうやって身につけたか話せる人もいないであろう。自分が人に対して抱いている好き嫌い、判断するときの価値観、それもなぜ、今のようになったのか憶えていることは、まず困難である。まして、自分に流れ込んできたもの、両親や先祖の想い、土地に流れ堆積していた感情や動機に気づく人は皆無に近いといえよう。しかも、無自覚さに支配されていることに気づけないために、それまでの生き方をそのまま続けようとして、轍はますます深くなってゆくのである。

以上、人生において誰もが避けられない共通の5つの鉄則についてみてきたが<sup>(35)</sup>、私たち人間に共通のものはそれだけではない。先祖や両親、さらに生まれた地域や時代にも大きな影響を受けることを誰も避けることができない。高橋氏はそれを「三つの『ち』」(図表2)と表現し説明している。それについて続けてみていく。

### 3. 三つの「ち」

両親からの「血」の流れ、土地からの「地」の流れ、そして時代からの「知」の流れ——。私たちは誰もが、この三つの「ち」の流れを過去からの遺産として引き受けることから人生を始める。そして、光と闇の混在するその流れによって、人生は呪縛を受けることになる。

---

(35) 5つの鉄則のうち「快苦の鉄則」はまさに「快感原則」とつながっていることがわかる。また、「幾百幾千の他人の鉄則」によって「私たちが自分自身だと思ってきたものの大部分は、自分以外の他人のコピー」であったことを知り、筆者自身驚かざるを得なかった。同時に、「では本当の自分は一体どこにあるのか」という疑問を抱いた。

図表2 三つの「ち」

血(ち)：血筋——両親や家系から流れ込んでくる価値観や生き方。 たとえば、両親のものの見方・考え方、現実や事態の受けとめ方、人に対する関わり方や行動の仕方、こだわりや偏見など。
地(ち)：地域——国や土地・地域、業界・会社等から流れ込んでくる価値観や生き方。 学校や会社、業界等を支配する暗黙のルールや価値観も同様。
知(ち)：知識——時代から流れ込んでくる価値観や情報。 江戸時代と現代とでは、職業観や人生観に大きな隔りがあるように、戦前と戦後に生まれた違いによっても、倫理観や人生観などが異なる。

出所：高橋佳子『Calling 試練は呼びかける』三宝出版、2009年、98頁。

### ①「血」の流れ

まず「血」とは、両親を通して私たちの中に流れ込む川の流れてである。母親が授乳しながら私たちに注ぐまなざしやそのぬくもり、語りかける一言一言、歌ってくれた子守歌、父親の働く姿、生きる後ろ姿……。それらを通して、私たちに流れ込む「血」の流れがある。

両親の感情の起伏、考え方や価値観、善悪観。また、人に対する関わり方や距離の取り方、事態に対する感じ方、受けとめ方、物事への関心の向け方や態度……等々。その一つひとつが怒濤のように、私たちの中に流れ込むのである。

両親がこだわりや偏見、不信感などを抱いていれば、それはごく自然に感覚や感情も伴って私たち自身のものになる。例えば、日頃直接的な関わりがあまりない親戚の人に対して、両親が嫌いであればなぜか私たちも好きになれず、逆に両親が好ましく思っている人に対しては、いつの間にか好印象を抱いていたということはないであろうか。

生い立ちの中で繰り返し聞かされた言葉も、「血」の流れとして私たちの人生に大きな影響を与える。「負けたら終わり」「正直者はばかをみる」「出

る杭は打たれるから、絶対に目立つことはするな」「人間は誇りを失ったら終わり」……等々、両親から繰り返し聞かされた言葉はそのまま心の奥に刻まれていき、いつの間にかその人のものになっていく。

両親が抱く価値観も、そのまま流れ込む。世間のまなごしに価値を置く親もあり、立場や地位を何よりももの拠りどころにする親もある。学歴こそが人を幸せにすると信じている場合もあれば、技術をつけることが先決とっている場合もある。両親が抱くそうした価値観を空気のように自然に吸い込んで、無自覚のうちに人生をつくりあげていくことになるのである。

### ②「地」の流れ

2番目の「地」とは、生まれ育ったその地域の風土や風習、習慣などの「土地」からの流れである。生まれ育ったその場所が、自然の豊かな田舎だったのか、都会だったのか。海辺だったのか、山間の村だったのか。閉鎖的な土地柄だったのか、開放的だったのか。豊かな国に生まれたのか、貧しい国だったのか。身分の差や職業の貴賤、階層の区別のある国だったのか、そうでないのか……等々、生まれ育った土地から流れ込んだものによって、受ける影響はまったく異なるものとなるであろう。一人の個人は、その土地の歴史や風土といった背景を背負うことになるのである。

### ③「知」の流れ

最後の「知」とは、時代・社会から流れ込む知識や思想、価値観、先入観などである。日本でも戦前と戦後では、受けた教育も社会の風潮も違い、人々が抱く国に対する忠誠心や愛国心はまったく異なっている。また、同じ戦後であっても、高度経済成長期に子ども時代を過ごした世代と、バブル経済崩壊後の世代では、職業観や金銭感覚、また幸福観が大きく異なるであろう。生まれた時代によって、憧れの職業も変わり、心が惹かれる人物も変わり、良しとする生き方も変わってしまうということである。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

④ 重要なことは、誰もが「無自覚」であるということ

遙かな過去より、多くのものを運んで流れ続ける「血地知」という三つの川の流れ——。私たちはその流れをすべて吸収し、そこにあったものを真実として疑うこともなく成長していく。過去からの光闇混在のバトンを遺産のように受け取って、誰もが人生を歩むのである。

重要なことは、このことに誰もが「無自覚」であるということである。この三つの「ち」から、まなごしを受け取り、言葉を受け取り、考え方を受け取り、人間観や世界観を受け取って、そして、いつの間にか「今の自分になっていた」のであるが、誰からどのようにそれらを受け取ったのかも無自覚で、受け取ったという意識すらない。

なぜ今のような好き嫌いを自分が抱くようになったのか、様々な価値観をいつからどのようにして自分が抱くようになったのか、そのルーツを遡ることができないままに、受け取ったものを「自分そのもの」と思い込んで生きることになるのである。

そのため、自分の考え方ややり方といっても、いつか誰かから受け取ったものであるにもかかわらず、それを否定されると、不快になったり、怒りを覚えたりする。

三つの「ち」によって軋轢が生じたり、不理解が生じる——。それは、個人と個人との間の問題に限らない。代々引き継がれる一族と一族の争いや隣村同士の諍い、ひいては何百年何千年にもわたる民族間の対立や国家間の紛争へとつながっていくのである。

⑤ 人生を呪縛する三つの「ち」

三つの「ち」を引き受けることによって、背負うことになる何よりも不自由、それは、三つの「ち」によってつくられた轍の方向にしか未来への道を選択できなくなることである。実際にはたくさんの選択の道が開かれているのに、一つの道しか選べなくなる。否、むしろ他の選択は思いつくことす

らできないのである。言葉を換えれば、三つの「ち」によってそれだけ歪みのある選択しかできなくなるのである。<sup>(36)</sup>

以上、三つの「ち」(血・地・知)についてみてきたが、その三つの「ち」という表現は、私たち一人ひとりがどのような心の縛りを無自覚に受け取る場所から生きはじめなければならないかについて、簡潔でわかりやすいとらえ方であると思われる。

「三つ子の魂百まで」という諺があるが、まさに幼い頃に仕入れた「三つの『ち』」が人生を生きる心の基盤を形成し、私たちは事あるごとにそれに影響されてしまう。誰もがそれからのがれることはできない。<sup>(37)</sup>それが私たちに想像以上に大きな影響を与えていることを知ることは、極めて大切なことであると思われる。

#### 4. 世界は、「崩壊の定」と「不随の定」が支配する場所である

三つの「ち」に加えて、私たちが生きている世界について心に深く刻んでおかなければならない重要な法則がある。それについて、高橋氏は「世界は、『崩壊の定』と『不随の定』が支配する場所である」として、それぞれを次のように説明している。

##### ① 崩壊の定

まず「崩壊の定」とは、私たちが生きるこの世界は、すべてのものが減していく、いわゆる「生滅の次元」としてあるということである。「諸行無常」の理が示すように形あるものはその形をとどめず、秩序は徐々に壊れていき、

---

(36) 高橋佳子『あなたが生まれてきた理由』三宝出版、2005年、116～127頁参照。

(37) 英語の諺にも同様に、“As a boy, so the man”, “The child is father of the man” というものがあり、このとらえ方は世界共通であることがわかる。

(38) ソニーの創業者である井深大氏は、同著『幼稚園では遅すぎる——人生は三歳までにつくられる!』サンマーク出版、2003年の中で、同様のことを指摘している。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

生あるものは時間とともに老いて死に至るということが、私たちが生きる生滅の世界の定である。「崩壊の定」は、この世界に存在するすべてのものにはたらく。

たとえば、物理世界には「エントロピー増大の法則<sup>(39)</sup>」というものがある。それは、すべての秩序あるものは、徐々にバラバラになり壊れていくという法則である。秩序から混乱はたやすく導かれても、混乱から秩序を導くには、大変なエネルギーが必要とされるのである。

生命についても同じである。この世界を生きるすべての生命は、生まれれば、やがて老い、病に罹り、そして死を迎える「生老病死」の原則から外れることはできない。この世界に生まれ、生きるということは、同時に死に向かかっていくということでもある。

さらに、私たち一人ひとりの人生にも、この「崩壊の定」ははたらいている。たとえば、この世界で初志を完遂するということがいかに難しいことであるか。確かな絆で結ばれていたはずの友情も、生涯の伴侶となることを誓い合った夫婦の絆も、時の流れとともに、朽ち果てていくことは、決して珍しいことではない。試練の連打の中で、運命に対する理不尽さを嘆き、生きる意味を失ってしまう人も少なくはないであろう。人として生きる輝きが、

---

(39) エントロピー (entropy) とは乱雑さの程度を表す量である。膨大な数の粒子が関与しているときには、乱雑さ (エントロピー) が減る方向には現象は進まない、というのがエントロピー増大の法則 (principle of increase of entropy) であり、熱力学の第2法則 (second law of thermodynamics) とも呼ばれる。自然界の現象は、部分的に見ると乱雑さが減っていることもあるが、そのときでも、その周囲の環境まで考えると全体としてはエントロピーは増えている。一方、熱力学の第1法則とは、熱のことまで考えたうえでのエネルギー保全則のことであり、この2法則が19世紀に確立した熱力学の基本である (清水均編集『現代用語の基礎知識』自由国民社、2012年、672頁参照)。なお、エントロピー増大の法則については、植田敦『エントロピーとエコロジー』ダイヤモンド社、1986年；柴田篤弘・植田敦『エントロピーとエコロジー再考』創樹社、1992年；Rifkin, J. (1990) *Entropy*, The Viking Penguin Inc. (J. リフキン著、竹内均訳『改訂新版・エントロピーの法則』祥伝社、1990年、257頁) なども参照。

この世界の荒波の中に四散して消え失せてしまうということ——。そこにはたらいているものも、この「崩壊の定」の力に他ならないのである。

## ② 不随の定

さらにもう一つの原則「不随の定」とは、「この世界は自分の思い通りにならない世界である」ということである。私たちは網の目のように無数の事象や存在と関わり合って生きている。その「諸法無我」の現実の中で生きていく以上、すべてが思い通りになるということはありません。私たちは誰もが無意識の底に「思い通りになってほしい」という強烈な願望、執着を抱いている。それゆえに、多くの問題や混乱が生じることになるのである。

先に述べたように生老病死も自分の思い通りにはならない。望まない事態も突然降りかかってくる。他人のとばっちりを受けることもあり、また自分も意に反して加害者となることもある。愛する人とも別れなければならず、逆に一緒に居たくない人とも時には机を並べて仕事をしなければならぬ。欲しいものはたくさんあっても、手に入るものは限られており、多くは諦めなければならない——。まさに思い通りにならないのがこの世界の現実に他ならない。そして、思い通りにならないことに弱い私たちがいる。そうした事態に見舞われると、当初の願いを忘れてたり、志を喪失したりしてしまうことが多々あるのではないか。

私たちは、これまでみてきた「崩壊の定」「不随の定」という峻厳なる法則の支配下で、不安定で危険な場所に多くの問題や混乱を抱えながら生きている。この二つの法則はまるで重力のように誰の上にも等しくのしかかり、逃れることはできない。その場所で、私たちは、望むと望まざるとにかかわらず、刻一刻、目の前に訪れる事態に対して、次々と形をつけてしまっている。そのような「大それたこと」をし続けているという自覚もなく、一人ひとりが絶え間なく現実をつくり出し続けており、否応なく人類の歴史に参画



地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

<sup>(40)</sup>  
してしまっているのである。

## V 今後に向けて

これまで地球環境問題の根本的な原因が、私たち一人ひとりの中に深く根づいている過剰な「快感原則」にあるととらえ、「なぜ私たちは『快感原則』を生きることになるのか」に関して、心理学からのアプローチと TL 人間学からのアプローチのそれぞれについてみてきた。

心理学からのアプローチについて、まずマズローによれば、私たちが生理的欲求などの基本的欲求に対してほとんど無意識的であり、それに基づいて判断し行動することから快感原則を生きざるを得ないことになる。岡本氏によれば、「自己意識の根底にある自己中心の欲望群」が私たちをして快感原則を生きさせている。青井氏によれば、私たちが聖なる高層や無意識の低層へと心を深化できていないために快感原則を生きざるを得ない。

また、TL 人間学からのアプローチでは、生まれてくることによって人生に流れ込んでくる三つの「ち」の束縛。それ以上に、人間を拘束する人生の仕組みとしての「人生の鉄則」。さらに、そのような人間の条件を包み込んでいる世界の条件としての「崩壊の定」「不随の定」。これらのいずれもが、私たちに如何ともし難い不自由さを宿命として与えるものであった。それらは個人の力でどうすることもできない。たとえ科学が進歩して、どのような仕組みの中に宇宙があるかを解明できたとしても、変えることのできない力である。それは、いつの時代も、どの地域に生まれようとも、変わることなく絶対的な条件として、人生を支配し続けているものである。<sup>(41)</sup> 私たちは、このような絶対法則が支配している厳しい世界で生きていかなければならない。そのことを心に刻んでおくことは本当に大切であると思われる。

---

(40) 高橋佳子『グランドチャレンジ』220～224頁。

(41) 高橋佳子『希望の原理』三宝出版、1997年、168～169頁。

三つの「ち」あるいは絶対法則から自由になることは「言うは易く行うは難し<sup>(42)</sup>」である。それらは、心にコントロールのようにベッタリと張り付いて、事あるごとにその影響を受けざるを得ない極めて強い心の縛りとなるものである。A. H. マズローも、「自己知識や自己改善は、大多数の人々にとって非常にむずかしい。通常大いなる勇気と長期の苦闘が必要である。……誤ったオプティミズムは、早晩、幻滅と怒りと絶望に変わるものである<sup>(43)</sup>」とのべている。

では、それらを乗り越え、一人ひとりが人間として深化・成長しながら、持続可能で調和された社会を築いていきたいという願いは、単なる理想論で終わるのであろうか。それを理想論で終わらせないために、私たちは快感原則を超える新しい原理・原則、人間や世界についての新しいパラダイムなどを探究していかなければならない。同時に、それらを基に、一人ひとりが新しい生き方に向かって、自分の心を見つめ（自己探求）、その自分があるがままに受け入れ（自己受納）、新しい自分となり（自己変革）、やがて自分自身を超えていくこと（自己超越<sup>(44)</sup>）が求められている。そして、願いを実現するとの意志を立て、日常生活の中で意識的に「人生を支配し続けている絶対

(42) 英語の諺にも同様に、“It is easier said than doing” というものがあり、このとらえ方も世界共通であることがわかる。

(43) Maslow, A. H., *Toward a Psychology of Being*, p. 166 (A. H. マズロー著、上田吉一訳『完全なる人間』221頁)。

(44) 高橋佳子『サイレント・コーリング』三宝出版、190頁参照。なお、マズローは自己実現に向かうための行動や手順について提示している (Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press, pp. 45-52 (A. H. マズロー著、上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房、1973年、56～67頁))。また、マズローの心理学研究で著名な上田吉一氏は、健康な人格は、自己受容、すなわち、理想の自己と現実の自己との間に大きなずれがなく、現実の自己を肯定的に受け入れることができると同時に、自己の現実をありのままに認識することができる自己客観化の特性をもつ。しかし、自己客観化は最も理解の困難な領域であることを指摘している (上田吉一『【新装版】精神的に健康な人間』川島書店、1993年、256～262頁参照)。

地球環境問題の根本的原因についての一考察（中丸寛信）

法則」に打ち勝つための心のエネルギーと智慧を引き出すことに挑戦し続け、様々な問題を解決へと導くことが必要不可欠であるといえよう。それについては、今後さらに検討していきたい。